

文久三年春三月將軍家茂公入京隨て諸侯の家族として各自國に就しむるに於て關東家  
にても若殿第次郎君後宗神立院原就も歸國と事足りければ關原縣左前門と書み後定若殿を  
守護せる忠義の人々の江戸表に關部結城等の奸黨逐居れども國許にの野村多村杯忠因い  
ど多ければ却て便宜を得る事多からんと喜び勇むで二方を奮闘し路次悉なく岸和田にこそ  
の着に是此で翌慶應元年に至りて筑前守殿にも國許へ入部成り妻花里續方石田音次も之  
が伴して奉りしが花里の若殿暗殺の一念兎角に止み難く種々奸計を廻らせども第一の機方  
たる結城の向江戸にあれば水と計るに不便多く容易に望と逃げらるべくもあらねば敢て  
寛が桑谷の旗合に習ひ姑く人目少き處に身と避て飽まで音次を熱戦せんものと故と謀定  
續りして病ひと披露なし暫爾某に多くの機を與へて云々と符合めお家の疾病の全く無  
の症なれば湯藥を以て容易く効を奏すべくもあらすかゝる病症にの湯治こそ第一の療  
なれと殿の御前へ申出させければ殿にの甚く心を痛め給ひ無醫の症どの心が、うなり  
に湯治させよとやがて花里に三周回身の機を廻りける去程に花里の衆より身の腹と聞

はりければ仕すまじたりと舌を吐くまで打喜び續て期したることなれば暫爾某用役への  
原宗五郎賄方に石田音次小使にの阪口金造女中へのかどり僅々五人を伴に連れ中にも  
音次にの仙臺平の袴と袖の單衣と與へて綺麗に粧束せ有馬の温泉に趣きて温泉宿河野越某  
方とば宿と定めぬ宿も花里の疾病の元來假病なれば湯治の名のみ朝夕音次を傍に招き私に  
件の密事をのみわにかくと語ひをりしが爰に一條尤も惜むべきの事こゝ出来にけれと  
如何に云にそも此石田音次の年尙二十の上と多くも越さで世にも稀なる美男なるが花里  
の平素仇々しき心よりいつし音次に懸想し問暇もあらは言ひ寄んものと嫌て心に思ひ川  
深くも懸慕れるたりしも人目の間に隔てられて是迄望と逃げざりしが昨日今日此く宿屋住  
居して四邊に人目少なければ平素の思ひを達する此時にこそと一日醫師某原阪口かどり  
等の四人の者に向ひ妾の疾病の事なれば籠居もつれづれにの思ひねど放逐いさぞ退屈なる  
べし今日の空もいと好く晴たるに 此里の名處舊迹を見物して来よかし妾の音次一人居れ  
ば事足れりと夫となく言出しに四人の者へ大に喜び後の事をば石田に托し何心なく出行ぬ